

能を切る



「四賢婦人・矢嶋榎子の生涯」

文 福永無想

第十三回 「不義の子」

榎子の体に異変が起きた。朝のみそ汁の匂いに吐き気を覚える。このところ体もだるく、そして月のものが遅れている…。3人も子どもを産んでいる榎子には、その原因がすぐに分かった。

身ごもった子の父親は誰でもなく、道ならぬ恋を忍ばせてきた矢嶋家の書生、鈴木要介であった。この妊娠にいち早く気づいたのは、猿楽町の同じ屋敷に住む姉の藤島もと子だった。

「子どもは墮ろしなっせ。産んでどがんするな」

「姉さま、授かった命は殺せません」

なれどもと子は、執拗に説得を続ける。「自分が何ばしようとしているのか、分かるとるとな。お前さまは教師ですばい。世間が、この不道德ば許すはずがなか。それだん産むというならば、生まれた子は父親に渡しなっせ」

もと子は、わが妹が貫こうとしていることが恐ろしくてならなかった。同じ年頃の

女には孫を抱く者もいるというのに、その年で、ましてや不義の子を産むなどと…。

だが榎子はいたって冷静であった。それに、子ができたことを鈴木に知らせたところで責任が取れるはずはないと、一人で猿楽町の家を出る決心をしていた。

教壇に立つ袴姿の、すでに膨らんできた腹をごまかすことができなくなったころ、榎子は休職を願い出て、練馬の知り合いの家身に身を寄せた。それからしばらくして女兒を産み、榎子自ら「妙子」と命名した。

知らせを聞き練馬へ訪ねて来た鈴木は、悩み抜いた末の、榎子の失望に怯えるかのような顔をして現れた。

「故郷の妻には、このことを知らせるつもりだ。これから先のことは…」

と言おうとした鈴木に榎子は、すやすやと眠っている妙子を抱かせた。

「二度だけこの子を抱いてあげて下さい。それで、終わりにしましょう」

そうきつぱりと言つて、鈴木の言葉の続きを遮った。榎子にすれば恨みがましく、これまでのことを責め寄るつもりなどなかった。道ならぬ愛に殉じた日々以後悔はなかったものの、自らの意志で犯したこの罪に、一生もがき続けることを覚悟していた。

出産から3カ月ほどが過ぎ、赤子の妙子の目も見えるようになった。妙子は練馬の

家で預かることになり、子を産んだばかりの近所の女に乳代を預け、榎子は再び下宿生活に戻った。

そんな折、福岡にいる兄の源助から、熊本の林家に残した榎子の長男の治定が、キリスト教に入信したという知らせが届く。その3年前のこと、明治政府はキリシタン禁制の高札を撤去し、これにより江戸時代から続いた禁教政策に終止符が打たれた。

明治9（1876）年、熊本洋学校の生徒34人が花岡山に集結した。熊本洋学校で米国人教師L.L.ジェーンズの影響を受けた生徒らは、プロテスタント・キリスト教に改宗し、これを日本中に広めようと結束したのだ。花岡山キリスト教奉教同盟事件である。この中に18歳になる治定もいた。

治定は益城を離れ、榎子の母の実家で本山に屋敷がある三村家に居候をし、熊本洋学校に通っていた。彼らがこうした行動に及んだ背景には、藩制の解体があった。忠誠の対象を失った治定たちのような青年にとって、もはや心のよりどころとなるものは宗教しかなかったのだ。

正直、榎子はうろたえた。だが、息子を信じようと思った。そしてこの時から、榎子とつてもキリスト教は遠い異国のものではなくなっていく。その後、治定たち熊本バンドのメンバーは、新島襄が創設した同志社へ進んでいった。

※この物語は、矢嶋榎子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

